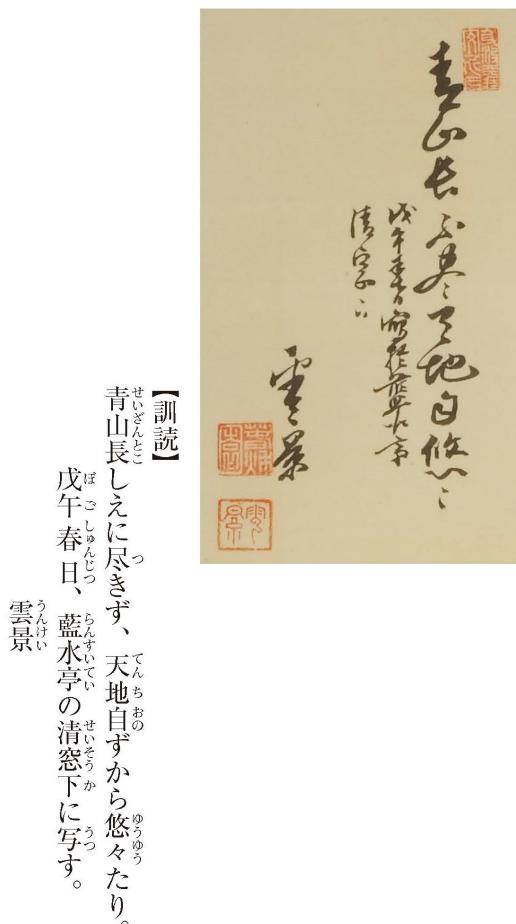


井上雲景 岐阜県穂積村(現在の瑞穂市)観音院第十五世住職

井上雲景(觀淳)は、1871(明治4)年2月9日、愛知県中島郡大和町毛受(現在の一宮市)に生まれ、幼にして仏門に帰依。1891(明治24)年、「濃尾大震災」で負傷した前住職に代わり、穂積村観音院第十五世住職として推举され、以後、寺の復興に全力を注ぎました。

一方、南画を得意として、師である南画家の山本梅荘、森半景に師事。詩文や絵画に秀でただけではなく、「資生産皆是仏道也」としてまず人



材を養い、郷里百年の計をたてんとして有道学会を創立して、青少年の育成にも努めました。さらに、村の発展を念じて三千本の桜の木を河川の堤防に植えるなど多方面で活躍されましたが、1949(昭和24)年10月10日、遷化されました。

雲景の作品は1931(昭和6)年発行の『有聲無聲集』(井上觀淳)や、1922(大正11)年発行の『全国絵画優秀作家絵画名鑑』にその名を見ることができ、各地で名士と言われる方々が所蔵しているようです。なお、当会所蔵の作品は、1918(大正7)年に描かれたもので、瑞穂市観音院のご協力により、同院で所蔵する雲景の作品の落款と比べてみると大変似ていることから、雲景の真筆に間違いないと考えられます。

ところで、雲景の作品が何故当会にあるのかは、『財産臺帳』(1929年12月)で確認できました。台帳には、1930(昭和5)年9月に杉本幸雄初代主事から当館の和室用に寄贈を受けたことが記録されていました。開館間もないこの頃は、まだ調度品などが全て揃わず、床の間も設えた和室を殺風景に思われて杉本主事が所有していたこの作品を寄贈されたのかもしれません。

[現代語訳]

あの草木が生い茂る青々とした山々は、この先も変わることなくあり続け、天地に存在する万物はただゆったりと時が流れていく。

戊午の年の春日、藍水亭の清窓にて描いた。 雲景

[協力] 野田市郷土博物館、岐阜県瑞穂市生涯学習課、岐阜県瑞穂市観音院、井上淳龍氏

[参考資料] 『穂積町史 通史編下巻(近現代)穂積町 昭和54年3月31日』／『野田文化の芽ばえ～明治から昭和中期の社会教育史』野田市郷土博物館・1999年10月2日発行／『レファレンス共同データベース』名古屋市鶴舞中央図書館・2009年1月15日登録日時